

## 司馬光の洛陽退居生活とその文學活動

中尾, 健一郎

<https://hdl.handle.net/2324/1804195>

---

出版情報 : 日本中国学会報. 60, pp.147-162, 2008-10-11. 日本中国学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 司馬光の洛陽退居生活とその文學活動

中尾 健一郎

司馬光（一〇一九—一〇八六）、字は君實、號は迂叟、陝州夏縣（山西省夏縣）の人である。『資治通鑑』の編纂者として著名であるが、これまで文學の方面においては殆ど注目されることがなく、『宋詩鈔』を繙いても彼の名は一顧だにされていない。つまり司馬光は、後世の人々にとって文學者としては殆ど意識されなかったと言える。しかし司馬光の文學はそもそも注目するに値しないものなのであるうか。果たして北宋當時においても、司馬光の詩文は周圍の士大夫達に何の影響力も持たないものだったのだろうか。

本稿はかかる問題意識の下に、司馬光の、特に洛陽退居時代に注目し、その文人生活を取りあげ、就中、彼の洛陽退居生活において重要な意味を持つ「獨樂」を手掛かりとして、北宋時代における彼の文學活動の實體とその意義について考察するものである。

なお、本稿に引用する司馬光の詩文は『溫國文正司馬公文集』（四部叢刊初編所收、以下『溫公文集』と略記）を底本とし、文字の異同については『増廣司馬溫公全集』（内閣文庫藏本）<sup>3</sup>並びに『傳家集』（文淵閣四庫全書所收）を参照する。彼の詩は、古詩（卷一より卷五）と律詩（卷六より卷十五）とに分けられており、洛陽時代の詩に限つ

司馬光の洛陽退居生活とその文學活動

て言えば、明らかに年代順に配列されている。また司馬光の事跡については、清・顧棟高「司馬太師溫國文正公年譜」（馮惠民點校『司馬光年譜』所收、中華書局、一九九〇年）に基づく。

## 一、司馬光の洛陽退居と「獨樂園記」

熙寧三年（一〇七〇）、王安石との政争に敗れた司馬光は、知永興軍に轉出した後、翌熙寧四年に西京留守御史臺として洛陽に赴任した。時に五十三歳であった。これ以後、元豐八年（一〇八五）に開封に召還されるまでの十五年間を洛陽で過ごすことになるが、洛陽に至った時の感慨を、司馬光は次のように詠んでいる。

三十餘年西復東	三十餘年	西し復た東し
勞生薄官等飛蓬	生を勞し	官薄きこと 飛蓬に等し
所存舊業惟清白	存する所の舊業	惟だ清白
不負明君有樸忠	明君に負かず	樸忠有り
早避喧煩眞得策	早に喧煩を避くるは	眞に得策たり
未逢危辱好收功	未だ危辱に逢はず	功を收むるに好し
太平觸處農桑滿	太平	觸處に農桑滿ち

羸取閭閻鶴髮翁 羸<sup>か</sup>ち取りたり 閭閻の鶴髮の翁

〔初到洛中書懷〕『溫公文集』卷十一

司馬光は寶元元年（一〇三八）に科擧に及第して官途に上つてより後三十三年間、「飛蓬」のように各地を巡つたが、ようやくにして司馬家の舊業のある洛陽に赴任することになった。早々と世間の喧噪を避け、危険や恥辱を被ることなく功績を収めることができるのは得策である、と詠いながらも、最後の一句では自らを村里の一老人に擬えるところに、一抹の寂寥感が漂う。

司馬光の洛陽での實際の生活は、蘇軾が「眇然として顔子の陋巷に在るが如く、纍然として屈原の陂澤に在るが如し」と述べるように、當時の司馬光にとって必ずしも好ましいものではなかったようである。だが司馬光は、失意を抱えながらも、洛陽における生活に楽しみを見出しつつあったと見られる。

次の詩は、退居の翌年に作られたと見られるものである。

吾心自有樂 吾が心 自ら樂しむ有り  
 世俗豈能知 世俗 豈に能く知らんや  
 不及老萊子 老萊子に及ばざるも  
 多於榮啓期 榮啓期よりも多からん  
 緼袍寬稱體 緼袍 寬やかにして體に稱ひ  
 脫粟飽隨宜 脫粟 飽きて宜しきに隨ふ  
 乘輿輒獨往 輿に乗じて輒ち獨往し  
 攜筇任所之 筇を攜へて之く所に任す

〔樂〕『溫公文集』卷十二

まず前半部分においては、自分には世俗の人々に理解できない楽しみがあるとして述べ、さらにその楽しみは老萊子には及ばないにしても、

榮啓期よりは多いという。續けて後半部分においては、その楽しみとは、粗布の衣服と粗末な穀物に満足し、輿に乗じれば筇竹の杖を攜えて獨り氣ままに遊行することである、と述べる。第七句の「獨往」は、謝靈運「入華子崗是麻源第三谷」〔文選〕卷二十六に見える語であり、李善が司馬彪の『莊子』注を引いて述べるところに據れば、自然に任せて世間を顧みないことを指すという。つまり司馬光は塵俗を離れ、奢侈を卻け、獨り自然の中に分け入ることに楽しみを求めていたのである。

司馬光のこのような「獨樂」は、彼の代表作「獨樂園記」〔溫公文集〕卷六十六においてさらに明確に示されるようになる。「獨樂園記」は長文のため、庭園の構成を紹介した部分を割愛し、以下を三つの部分に分けて引用することにする。

孟子曰、獨樂樂、不如與人樂樂。與少樂樂、不如與眾樂樂。此王公大人之樂、非貧賤者所及也。孔子曰、飯蔬食飲水、曲肱而枕之。樂亦在其中矣。顔子、一簞食、一瓢飲、不改其樂。此聖賢之樂、非愚者所及也。若夫鷓鴣巢林、不過一枝、偃鼠飲河、不過滿腹。各盡其分而安之。此乃迂叟之所樂也。

孟子曰く、「獨り樂して樂しむは、人と樂して樂しむに如かず。少なきと樂して樂しむは、眾と樂して樂しむに如かず」（梁惠王下）、と。此れ王公大人の樂しみにして、貧賤の者の及ぶ所に非ざるなり。孔子曰く、「蔬食を飯らひ、水を飲み、肱を曲げて之に枕す。樂しみ亦た其の中に在り」（論語・述而）。「顔子、一簞の食、一瓢の飲、其の樂しみを改めず」（論語・雍也）、と。此れ聖賢の樂しみにして、愚者の及ぶ所に非ざるなり。若し夫れ「鷓鴣の林に巢くふは、一枝に過ぎず、偃鼠の河に飲む

は、腹を満たすに過ぎず」(莊子・逍遙遊)。各おの其の分を盡くして之に安んず。此れ乃ち迂叟の樂しむ所なり。

まず『孟子』と『論語』を引いて、人と共に享受する王者の樂しみ、赤貧に甘んじて泰然自若と過ぐす聖賢の樂しみをそれぞれ擧げ、自身は「王公大人」でも「聖賢」でもなく、單に「貧賤」たる「愚者」に過ぎず、王者や聖賢のような樂しみは享受できないとし、さらに『莊子』を引いて、己の自分を全うして知足の境地に安住することこそ、「迂叟」つまり司馬光自身の分に合った樂しみである、と述べる。

これは一種の韜晦であると筆者は考へるが、その理由については第二節で詳述することにし、ここでは「獨樂園記」を續けよう。

熙寧四年、迂叟、始家洛、六年、買田二十畝於尊賢坊北、闢以爲園。(中略)迂叟平日、多處堂中讀書。上師聖人、下友羣賢、窺仁義之原、探禮樂之緒。自未始有形之前、暨四達無窮之外、事物之理、舉集目前。所病者、學之未至。夫又何求於人、何待於外哉。志倦體疲、則投竿取魚、執衽采藥、決渠灌花、操斧剖竹、濯熱盥手、臨高縱目、逍遙相羊。唯意所適、明月時至、清風自來、行無所牽、止無所梃、耳目肺腸、悉爲己有。踽踽焉、洋洋焉。不知天壤之間復有何樂可以代此也。因合而命之、曰獨樂園。

熙寧四年、迂叟、始めて洛に家し、六年、田二十畝を尊賢坊北に買ひ、闢きて以て園を爲る。(中略)迂叟平日、堂中に處りて書を読むこと多し。上は聖人を師とし、下は羣賢を友とし、仁義の原を窺ひ、禮樂の緒を探す。未だ有形の始まらざる前より、四達無窮の外に暨び、事物の理、目前に擧集す。病む所は、學の未だ至らざるのみなり。夫れ又た何をか人に求め、何をか

司馬光の洛陽退居生活とその文學活動

外に待たんや。志倦みて體疲れば、則ち竿を投じて魚を取り、衽を執へて藥を採り、渠を決いて花に灌ぎ、斧を操りて竹を割き、熱を濯ぎ、手を盥ひ、高きに臨んで縱目し、逍遙して相羊す。唯だ意の適ふ所は、明月時に至り、清風自ら來たり、行きでは牽く所無く、止まりては梃むる所無く、耳目肺腸、悉く己が有と爲る。踽踽焉たり、洋洋焉たり。天壤の間に復た何の樂しみか以て此に代ふべき有るかを知らざるなり。因りて合して之に命づけ、獨樂園と曰ふ。

獨樂園は、白居易の舊宅のあった履道坊に鄰接する尊賢坊に構えられており、約一百十アールの面積を有した。李格非『洛陽名園記』に據れば、獨樂園は他の庭園ほど廣大ではなく、讀書堂を始めとする園内の建物の規模も比較的小さかったという。

司馬光は平素この庭園の中で書物を読み、書中の聖人賢者を師友とする。讀書に倦めば、庭園内で釣り、藥草採り、園藝に興じ、園内の水で手足を洗って涼を取り、散策を樂しみ、特に明月の夜には清らかな風に吹かれながら獨樂園の中を逍遙し、その景色を獨り賞玩する樂しみは何ものにも代え難い、と述べている。

庭園の堀を隔てて、その外側は車馬が雜踏する紅塵の巷であるのに對し、その内側は閑靜で清淨な別世界である。司馬光は洛陽城内に獨樂園を造成し、世俗に身を置きながら、俗世間とは一線を畫した雅の世界を獨り樂しんだのである。

しかし司馬光にとって、このような「獨樂」は世人の非難を蒙りかねないものとしても意識されていた。

或咎迂叟曰、吾聞君子所樂、必與人共之。今吾子獨取足於己、不以及人。其可乎。迂叟謝曰、叟愚、何得比君子。自樂恐不足、安

能及人。况叟之所樂者、薄陋鄙野、皆世之所棄也。雖推以與人、且不敢。豈得強之乎。必也有人肯同此樂、則再拜而獻之矣。安敢專之哉。

或るひと迂叟を咎めて曰く、「吾聞く、『君子の楽しむ所は、必ず人と之を共にす』と。今、吾子は獨り己に足るを取り、以て人に及ぼさず。其れ可ならんか」と。迂叟、謝して曰く、「叟愚なれば、何ぞ君子に比するを得ん。自ら楽しむも足らざるを恐るるに、安くんぞ人に及ぼす能はんや。況んや叟の楽しむ所のは、薄陋鄙野にして、皆な世の棄つる所なり。推して以て人に與ふと雖も、且に取らざるべし。豈に之を強ふるを得んや。必ずや人に肯へて此の樂を同じくするもの有らば、則ち再拜して之を獻ぜん。安くんぞ敢へて之を専らにせんや」と。

ここでは、作者架空の設定と見られるある人物が、司馬光に對して、獨りで楽しむのは君子の行うことではないと非難するのが見える。「獨樂」という言葉が「獨善」と同義に受け取られかねないことは、司馬光の豫想するところであつたのだから。そこで司馬光は、自身は君子ではなく、また楽しむところのものも世間が棄てて顧みないものであるが、もし己と同様にこの樂しみを享受する人がいれば、進んでこれを獻じたいと述べるのである。「獨樂」が決して「獨善」ではないという、司馬光の意思表明とも受け取れよう。

以上、司馬光の洛陽退居直後の失意と樂しみ及び「獨樂園記」について見てきたが、司馬光のいわゆる「獨樂」とは、塵俗を離れて奢侈を卻け、自然を樂しむことであり、決していたずらに孤高を氣取つた杜門厭世の隱者の樂しみではなく、あくまでも世俗の中に身を置きな

がら、志を同じくする人々と共に分かち合いたいと願う文人の樂しみなのである。

## 二、洛陽における司馬光の詩作活動

洛陽退居時代に司馬光は詩の秀作を多數残しているが、本節ではその代表的な作品を幾つか分析し、司馬光の詩作活動の實態に觸れよう。まず司馬光の洛陽退居生活の一面を端的に示す作品に次のようなものがある。

老去春無味	老い去れば	春に味はひ無く
年年覺病添	年年	病の添ふを覺ゆ
酒因脾積斷	酒は脾積に因りて	斷ち
燈爲目痾嫌	燈は目痾の爲に嫌ふ	
勢位非其好	勢位は其れ好むところに非ず	
紛華久已厭	紛華は久しく已に厭ふ	
唯餘讀書樂	唯だ讀書の樂しみを餘すのみなれば	
暖日坐前檐	暖日	前檐に坐す

(一)上元書懷『溫公文集』卷十二

年老いたために體が衰弱し、病氣は年々増える一方である。健康上の理由で酒も斷ち、目の痛みは燈光を嫌うほどである。權勢と富貴は好むところでなく、殘された唯一の樂しみと言えば讀書であり、暖かい日には縁側に坐して讀書を樂しむ。様々な困難の中で生きる司馬光の洛陽退居生活の一側面が端的に示されている。

しかし如何なる逆境の中でも司馬光が忘れなかつたのは、風流を樂しむ心であつた。それは次の詩にも明確に示されている。

閑中有富貴 閑中に富貴有り

迥與俗塵殊

迥かに俗塵と殊なる

水淨齊紈展

水淨きこと齊紈を展ぶるがごとく

花繁蜀錦紵

花繁きこと蜀錦を紵らすがごとし

竹風寒扣玉

竹風 寒くして玉を扣くがごとく

荷雨急跳珠

荷雨 急にして珠を跳ぬるがごとし

可笑公孫衍

笑ふべし 公孫衍の

酣歌誇丈夫

酣歌して 丈夫を誇るを

(閑中有富貴) 『溫公文集』卷十四)

この詩において、司馬光はまず閑適の世界にこそ世俗とは異なる富貴が有ると述べ、自然界の淨らかな水や美しい花を齊の白絹や蜀の錦に喩え、また竹風や荷雨の音を玉を叩く音や珠の跳ねる音に喩える。そして最後の二句においては、戦國時代の縦横家公孫衍が、世俗の富貴を誇ったことを嘲笑する。

司馬光は自然の中にこそ本來的に人間を豊かにする要素が含まれていると見なし、自然に恵まれた生活の中に生きる價值を認めていたのである。また單に自然を愛好するのではなく、たとえ現實の生活は富裕でなくとも、精神的に豊かな生活を送ることを詩に詠むことにより、世俗に優越する境地を示そうとしたのである。

しかし司馬光はこの境地を獨占することはしなかった。司馬光の「獨樂」が、孤高を氣取るものではないことは前に述べたが、現實において司馬光は、自然を愛でる樂しみを共有する同好の士を求めたのである。

草濃初過雨

草は濃やかにして初めて雨過ぎ

林靜遠含煙

林は靜かにして遠く煙を含む

燕引新飛穀

燕は新たに飛ぶ穀を引き

司馬光の洛陽退居生活とその文學活動

荷承半墜蓮

荷は半ば墜つる蓮を承く

朋來惟有月

朋の來るに惟だ月有るのみ

山見不須錢

山見ゆるも錢を須ひず

誰與同其樂

誰か與に其の樂しみを同じくせん

壺中濁酒賢

壺中に濁酒の賢なるあり

(和王安之題獨樂) 『溫公文集』卷十四)

この詩は、司馬光が獨樂園を訪問した王尚恭(字は安之)に唱和したものである。雨上がりの初夏の獨樂園では、燕が雛を連れて飛び、池の蓮は満開である。訪ねて來た朋友に提供できるのは、明月と嵩山の眺望及び濁酒のみであると述べ、この樂しみを共にしようとする王尚恭を誘う。

司馬光は「肯へて此の樂を同じくす」(獨樂園記) べく現れた王尚恭に、己の「獨樂」を獻じようとしたのである。この詩において、司馬光の「獨樂」が他者とも共有できるものであることが再確認されるが、そもそも同好の士と自然の景物を愛でつつ詩酒を樂しむというのは、司馬光の敬愛する白居易が尚齒會にて行ったことであった。

吾愛白樂天

吾は愛す 白樂天

退身家履道

身を退けて 履道に家す

釀酒酒初熟

釀酒 酒初めて熟れ

澆花花正好

澆花 花は正に好し

作詩邀賓朋

詩を作りて賓朋を邀へ

欄邊長醉倒

欄邊に長に醉倒す

至今傳畫圖

今に至るまで畫圖に傳ふ

風流稱九老

風流 九老を稱す

(獨樂園七題・澆花亭) 『溫公文集』卷四)

この詩は、「獨樂園七題」と題する連作詩の一首である。司馬光は「獨樂園記」のほかに「獨樂園七題」を作っているが、これは獨樂園内の七つの景物（「讀書堂」「釣魚庵」「采藥園」「見山臺」「弄水軒」「種竹齋」「澆花亭」）に因んで、前漢の董仲舒、後漢の嚴光・韓康、東晉の陶淵明・王徽之、唐の白居易・杜牧への敬慕を詠んだものである。これらの人物の中には學者もあれば、隱者もあり、また詩人もあるが、いずれも司馬光が好ましいと判断した生活様式を持った人々である。

司馬光は「澆花亭」詩において白居易を追慕しているが、その人物像は、酒を嗜み、花を愛で、詩を作って友人達を招いては酔い癡れ、九老會の圖と共にその風流を伝えるというものである。

實際、司馬光は元豐六年（一〇八三）、六十五歳の時に、白居易の尙齒會に倣って「眞率會」を結成し、同好の士と自然の景物を楽しんでいる。參會者は兄の司馬旦と、王尚恭、席汝言、楚建中、王慎言、宋道竝びに鮮于侁、范純仁であり、退職官僚または閑職に身を置いた士大夫達である。その集まりの様子は次のようである。

洛陽衣冠愛惜春	洛陽の衣冠	春を愛惜し
相從小飲任天真	相ひ從ひて小飲し	天真に任す
隨家所有自可樂	家の有する所に隨ひて自ら樂しむべし	
爲具更微誰笑貧	爲に具ふるの更に微なるも誰か貧を笑らん	
不待珍羞方下筯	珍羞を待ちて方めて筯を下すにあらざ	
只將佳景便娛賓	只だ佳景を將つて便ち賓を娛しましむ	

〔和路公眞率會詩〕第一句（六句）『溫公文集』卷十四

この詩は、司馬光が文彦博（潞公）の詩に唱和したものである。洛陽の士大夫は春を愛惜し、宴席を設けて自然に任せ、氣の向くままに振る舞う。各家の所有するものを楽しみ、供する食事が少ないからと言って誰も嘲笑したりしない。たとえ珍味が無くとも、自然の良き風景を以て賓客を楽しませるからである。自然の好風景を愛でることは、「獨樂園記」にも述べられているが、司馬光は「眞率會」を結成することにより、世俗を離れて共に風流な生活を過ごすことのできる同志を獲得したのである。

北宋期、白居易の尙齒會に倣うことは、眞率會以前にも行われており、歐陽脩が洛陽で開いた「八老」の集會や、文彦博が元豐五年（一〇八二）に開催した「洛陽耆英會」があるが、眞率會がこれらと異なるのは、白居易のみならず陶淵明を追慕し、會約を定めて贅澤を戒め、極力貴顯を排除しようと努めたことである。

眞率會の名稱は、『宋書』陶潛傳に見える「眞率」の語に由來し、第三句の「天真に任す」も、陶淵明の「連雨獨飲」詩（『靖節先生集』卷二）に「眞に任せて先んずる所無し」とあるのを踏まえる。王尚恭を始めとする參會者達は、司馬光の「獨樂」に共鳴して陶淵明と白居易を慕い、自然の中に眞實と風流を見出したのである。

ここまで、司馬光が洛陽に移住して以來、讀書と自然の景物を愛好する「獨樂」の楽しみを、「獨り樂しむ」ものから、同好の士大夫達にまで及ぼしたことを見てきた。では、司馬光が「獨樂」を個人のものから周圍へと波及させたのは、ただ孤獨を癒すためであったのだろうか。確かに洛陽時代初期の詩には、孤獨感を詠むものが見えるが、司馬光が自らの庭園を「獨樂園」と命名し、また「獨樂園記」を著したのは、單に同好の士を求めての故とは考えられない。そこには、何

らかの意圖が潜められているのではないか。このような疑問を發する時、「獨樂」という言葉が生み出される背景に、一體何が有ったかについて思いを致す必要があるだろう。

司馬光が「獨樂園記」を著したのは熙寧六年（一〇七三）、時に五十五歳であるが、その直前に『資治通鑑』の編纂書局が開封から洛陽に移るといふ事件があった。そのことは司馬光が『資治通鑑』編纂官の一人である范祖禹に宛てた書簡「與范夢得論修書帖」其一（陸狀元増節音註精義資治通鑑）卷一所收）によって窺い知れるが、鄒國義氏の研究に據れば、熙寧五年八月から熙寧六年三月にかけてこの書簡が著された背景には、新法派と舊法派の對立により、開封の『資治通鑑』編纂書局が閉鎖の危機に見舞われるといふ事情があったとされる。結果的に書局は洛陽に移り、『資治通鑑』の編纂事業も繼續することになるが、司馬光はこの時期に西京御史留臺から提舉崇福宮に移っており、書局の移轉と官職の異動及び獨樂園の造成が、全く無關係なものではなかったと考えられる。つまり司馬光は新法舊法兩黨派の對立の渦中において、『資治通鑑』の編纂を中止に追い込まれないために、自らが政治的野心を持っていないことを世間に對して表明する必要があったと見られるのである。こうした背景からすれば、司馬光が庭園に「獨樂」と名づけたのも決して單なる偶然とは思えない。

筆者は、司馬光の獨樂園の命名には三つの意圖が込められていると考える。まず一つ目は「獨り樂しむこと」の表明である。これについては「獨樂園記」の最後段に假託された世人の非難より窺える。しかし、それは表面的なものであり、後述するように、司馬光は自分だけが樂しむことができれば良いと考えていたのではない。

次の二つめは、政治的な立場の「韜晦」である。「獨樂園記」の冒

頭に述べられる「獨樂」の語は、前述のように『孟子』に由來するが、司馬光が慕った白居易の詩にも「自ら宜しき所を得て還た獨り樂しむ」とあり、『孟子』よりもむしろ隱遁を主題とした白詩の方が典故としては合っている。周知のように、司馬光の號である迂叟は、白居易の「迂叟」詩に基づいており、司馬光が「獨樂園記」に、「叟愚なれば、何ぞ君子に比するを得ん」と述べるのも、白居易が「迂叟」詩に「應まに須く繩墨機關の外に、疎愚鈍滯の身を安置せん」と自らを愚者に喩えるのを踏まえるであろう。そうすると司馬光はただ獨り樂しむだけでなく、「迂叟」と號し、愚者の假面をかぶることににより、自身の政治的立場を韜晦しようとしたと言える。

ただ「獨樂」は單に白居易の影響に留まるのではない。三つ目は、「時弊を改める」ことである。言い換えれば、司馬光にとっての「獨樂」は、隱遁に徹するような消極的なものではなく、むしろ孤獨にあっても世間に對して道德的であり、且つ非俗的な生活の在り方を主張する意志をも内包したと見られる。

司馬光の洛陽における生活について、劉安世は「當時の君子の自ら伊（尹）・周（公）・孔・孟に比なぞふを以て、公乃ち植竹・澆花等の事を行ひて、自ら唐晉間の人に比へ、以て其の弊を救はんとす」と述べているが、これは當時の士大夫に、自らを古代の賢人宰相に擬える者が現れたため、時弊を改めるために晉や唐の先人に倣ったというものである。ここで言う先人とは、直接には「獨樂園七題」に詠まれている東晉の王徽之と唐の白居易を指し、更には陶淵明と杜牧を含む。これらの中、王徽之を除く三者はいずれも首都を離れた土地で名利を求めない生活を実践した人々であり、王徽之にしても俗を避けて竹を友と見なした風流人である。また先秦の聖人に自らを擬えた人物とは、

王安石を指すと見られる。<sup>24)</sup>つまり劉安世は、司馬光が晉・唐の先人に模範を仰いだのは、國都開封で聖人氣取りの王安石に對抗し、名利を追い求める風潮に歯止めをかけようとしたからであると述べるのである。司馬光自身は獨樂園に關わる詩文を創作した動機を語っていないが、劉安世は司馬光の直弟子であるから、その發言には信憑性がある。上記を踏まえれば、南宋の黃徹が「其の心の憂樂、未だ始めて天下のことに在らずばならず」と述べるように、司馬光が「獨樂園記」と獨樂園を主題にした連作「獨樂園七題」を作ったのは、當世の士大夫を感化しようとしての行爲であつたと見てよいだろう。

實際に「獨樂園七題」の内容は、白居易の風流に倣うこと（「澆花亭」の外に、學問に精勤すること（「讀書堂」）、吏隱となつて詩酒を樂しむこと（「弄水軒」）、微祿のために齷齪しないこと（「釣魚庵」）、清貧に甘んじること（「種竹齋」）、名利から遠ざかること（「采藥園」）、隱遁しながらも忠君の精神を忘れないこと（「見山臺」）等、教訓的内容が詠まれている。これらは自身に對する戒めであると同時に、高雅で風流な生活の在り方として、名利の追求に明け暮れる人々に對して主張されるものであつたと考えられる。

司馬光の洛陽時代の作品は、現實に當時の士大夫においても廣汎な影響力を及ぼしている。李格非『洛陽名園記』には、「溫公、自ら之（獨樂園）が爲に序し、諸亭臺の詩、頗る世に行はる。人の欣慕するところと爲る所以は、園に在らざるのみ」と記述されており、獨樂園はその佇まいによつてではなく、司馬光の「獨樂園七題」によつて廣く名を知られていたことが分かる。また、邵伯溫も『邵氏聞見錄』に、司馬光が友人の范鎮と洛陽近邊の名山を巡り、互いに應酬した詩を集めた「遊山錄」が、當時の士大夫によつて争つて書き寫されたことと述べ

る。<sup>25)</sup>「遊山錄」は散佚しているためその内容を知る術がないが、「獨樂園七題」を讀む限り、司馬光が求めていたのは、地位や名譽、富の追求を習いとした世俗の價值觀の對極にある高雅で風流な文人生活であつたことが分かる。眞率會についても同様のことが言える。秦觀は「鮮于子駿行狀」に、「搢紳、其の遊びを慕ふ」と、眞率會が當時の士大夫の慕うところとなつたと述べるが、これらの事を踏まえれば、司馬光の「獨樂園」は、獨樂園を舞臺とする彼の詩作活動により、「獨りの樂しみ」から、眞率會の同志を得て、「時弊を改め」、「賢者と共にする樂しみ」へと昇華し、當時の士大夫に大きな影響を與えるものになつたと考えられる。

このような司馬光の詩歌は、世俗の顧みない自然に價值を與え、反俗の價值觀を世間に向けて發信するものであり、當時の士大夫達もこれに共感したからこそ、争つてこれを傳えたのではなかつたか。

合山究氏は、熙寧六年（一〇七三）頃より蘇軾や黃庭堅が「不俗」（風流）の立場から對俗批判を行つたことを取りあげ、彼らにおける「俗」と「不俗」との分岐點は「自然を解する心の有無」にあつたことを示唆している。<sup>26)</sup>そうであれば、蘇黃よりむしろ司馬光の方が先んじて富や名譽を追求する世俗の價值觀を否定し、陶淵明や白居易を慕つて自然の景物を愛でたのであり、前に見たように「獨樂園七題」や「遊山錄」が士大夫の間で盛んに書き寫されたことから見れば、當時において名譽といい、社會的立場といい、蘇黃を遙かに凌駕した司馬光の方が、文壇により大きな影響力を持っていたことを疑う餘地はないであろう。

司馬光は、「時弊を改める」意圖を以て、自然の中に風流を見出す高雅な生活が存在することを繰り返して詠むことにより、蘇黃による反

俗の氣風の形成において、先驅的で且つ大きな役割を果たしたのである。

### 三、北宋における司馬光の「獨樂」の意義

これまで、司馬光の獨樂園における詩作活動が、時弊を改める意圖によって行われたものであり、司馬光の詩が當時の士大夫達の間で盛んに傳えられたことを述べた。本節では司馬光の「獨樂」が持つ意義について考察するが、それに先立ち、司馬光とその他の文人の退居生活において、如何なる相違点があるかについて若干觸れておきたい。

司馬光と同時代に退居生活の樂しみを謳歌した人物に、歐陽脩と王安石がいる。まず歐陽脩である。彼は「醉翁亭記」において、「山林の樂しみ」「禽鳥の樂しみ」「人の樂しみ」を内包する「太守の樂しみ」を述べたが、熙寧四年（一〇七二）に致仕して以來、「六一居士」と號し、俗世間とは交渉を斷ち、趣味の世界を樂しんだ。

一方、王安石は、熙寧七年（一〇七四）より南京に移り住み、半山に居を定めて退居生活を送った。この時期の詩には、南京郊外の鍾山における山中の樂しみが、「眞の樂しみ」として詠まれている。

漱甘涼病齒 甘きに漱げば病齒涼しく

坐曠息煩襟 曠きに坐せば煩襟息む

因脫水邊屨 因りて水邊に屨を脱ぎ

就敷巖上衾 就きて巖上に衾を敷く

但留雲對宿 但だ雲の對ひて宿るを留め

仍值月相尋 仍ほ月の相ひ尋ぬるに値ふ

眞樂非無寄 眞樂 寄するところ無きに非ず

悲蟲亦好音

悲蟲も亦た好音なり

司馬光の洛陽退居生活とその文學活動

〔定林〕『臨川先生文集』卷十四<sup>①</sup>

「定林」とは、鍾山に在った寺院である。この詩に王安石は、山中にて口を漱ぎ、開けた場所に座していると胸中の思い煩いが消え去る。そこで水邊に履き物を脱ぎ、岩の上に氣ままに寢牀を敷く。ただ雲と共に向かい合っていると、自らを尋ねて來たかのように満月が現れた。眞の樂しみに身を委ねれば、悲しく聞こえる蟲の音さえも耳に心地よい、と述べる。王安石の樂しきは、このように山林の自然の中において見出されるものであった。

歐陽脩にしても王安石にしても、官僚として政治の場に臨む場合は、「先憂後樂」の姿勢を堅持しているが、一旦退居するに至るや、共に俗世間から離れて隱遁し、趣味や自然の景物を樂しむなど、それぞれ悠々自適の生活に身を置いている。

それでは、司馬光が洛陽で營んだ樂しきは、歐陽脩・王安石の樂しみとどのような違いを持つだろうか。

案ずるに、司馬光と歐陽脩・王安石との最も大きな違いは、歐陽・王の両者が都會の喧噪を離れた場所で靜かに退居生活を樂しむのと異なり、司馬光は洛陽城内という俗世間に身を置きながら、世俗との交渉を斷たず、『資治通鑑』の編纂に攜わり、忙中に閑適の樂しみを求めたことである。

司馬光が非常に多忙であったことは、元豐元年（一〇七八）に宋敏求に送られた書簡（「與宋次道書」南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』後集卷二十二所引）にも述べられており、『資治通鑑』はこの時點で、唐の大曆末年までの草稿しかできていなかったことが分かる。こうした狀況下で、司馬光が「獨樂園記」やその他の詩に詠まれるような樂しみを充分に享受することは、實際には稀であったであろう。司馬光が

めに行つた「獨樂」、並びにこれによつて生み出された洛陽時代の詩文は、北宋期の文學を考へる上で極めて重要な位置を占めることを、筆者は此處にあらためて強く主張するものである。

### おわりに

以上、司馬光の洛陽退居生活とその文學活動について考察した。從來、司馬光の文學に對する研究は極めて薄弱であり、中でも特に洛陽退居期の文學活動の實體は殆ど説明されていなかったと言つても過言ではない。しかし本稿において論じたように、司馬光の洛陽時代の文學活動は、大變重要な意義を持つものである。特にその「獨樂」の理念の下に行われた風流な文人生活は、同時代の士大夫達の憧憬の的となつており、自然を愛し塵俗を批判したその文學はやがて蘇軾らによる反俗の文學の先驅けとなるなど、その意義は極めて大きい。

なお司馬光のこのような文學は、洛陽という土地と切り離して論じることができない。何故なら司馬光の文學は、洛陽という都市が持つ獨特の氣風の中で芽生え、花開いたものだからである。

風光明媚な自然に加えて悠久の歴史を有する洛陽は、文雅の都として古來多くの文人がここに集つた。西晉には石崇の「金谷園の宴」が開かれ、唐代には韓愈と韓門の人々が交遊した。また白居易が尚齒會を開いており、歐陽脩と梅堯臣がこれを受け繼いで「八老」の集會を開き、さらに文彦博と司馬光がそれぞれ耆英會・眞率會を開いた。このような現象が見られるのは、洛陽が舊白居易邸を始めとする唐代の遺跡を多く残していたからである。言うならば北宋の士大夫達にとつて、洛陽で詩會を開くことは唐人の風流に倣うことであり、それは國都開封では不可能なことであつた。つまり北宋の士大夫達は洛陽で文

學活動を營むことにより、假に政治的に不遇であつても文化的には唐人の後繼者となり得たのである。またそれ故に、特に新法派が權力を掌握していた熙寧・元豐年間に、司馬光を始めとする士大夫達は白居易の風流な生活を敬慕したのである。

洛陽という都市が北宋期の文人集團の形成において大きな役割を果たしたことは、既に先行研究に指摘があり、また彼の地における文人集團の存在が、文學史上決して看過できないものであることは、司馬光の例を見ても明らかである。今回は觸れることができなかったが、熙寧・元豐年間における司馬光と洛陽の文壇との關係、司馬光と蘇軾及びその門下との關係については、さらに説明すべき問題が多數残つている。これらを筆者の今後の課題としたい。

### 注

- (1) 司馬光の文については、王安石が「君實之文、西漢之文也」と評したという逸話(北宋・邵伯溫『邵氏聞見錄』卷十)がある外に、『資治通鑑』の編纂者であるということもあつて一定の評価が與えられているが、詩については清・李調元が『雨村詩話』卷下(『清詩話續編』第三册所收、上海古籍出版社、一九八三年)に、「溫公詩絕少佳句、蓋史才非詩才也」と述べるように、その評價はあまり芳しくない。特に清代以前にその詩を顧みる者が稀であつたことは、清・賀裳『載酒園詩話』(前掲『清詩話續編』第一册所收)「司馬光」の條に「荆公詩人猶稱之、溫公絕無言及者」と述べられる通りである。近代以降は、陳衍『宋詩精華錄』に十三首が收められるなど、一定の評価が與えられる場合もあるが、著名な錢鍾書の『宋詩選注』もやはり『宋詩鈔』と同様に司馬光の詩を一首も收めておらず、彼の詩人としての認知度は格段に低いと言えよう。また、王運熙・顧易生主編『宋金元文學批評史』上册(上海古籍出版社、

一九九六年)、孫望・常國武主編『宋代文學史』上冊(人民文學出版社、一九九六年)、劉人傑主編『中國文學史』第四卷・第五編『宋遼金文學』(中國對外翻譯出版公司、一九九九年)にも司馬光について言及があるが、單獨で一章を設けて紹介されるには至っておらず、他の宋代の詩人と比較すれば、文學者としての司馬光は、甚だ注目の度合いが少ないと言わざるを得ない。

- (2) 先行研究には、中國では顔中其「司馬光詩歌剖視」(『晉陽學刊』一九八六年第六期)、張海歐『北宋詩學』(河南大學出版社、二〇〇七年)第四章「王安石、司馬光的詩學思想」等がある。また、楊洪傑・吳麥黃『司馬光』(山西人民出版社、一九九七年)第十章「退隱西京」に、司馬光の洛陽時代の作品を引用した詳しい分析がある。日本では寺地遵「司馬光における自然觀とその背景」(『東方學』第三十二輯、一九六六年)、三浦國雄「資治通鑑考」(『日本中國學會報』第二十三集、一九七一年)、名畑嘉則「司馬光『潛虛』について」(『日本中國學會報』第四十一集、一九八九年)、森博行「司馬光・邵雍交友錄(前・中・下の上・下の下)」(『大谷女子大國文』第三十三號〜第三十六號、二〇〇三年〜二〇〇六年)等がある。

- (3) 一九九三年に李裕民・佐竹靖彦兩氏の解題を附し、汲古書院より影印出版されている。

- (4) 司馬光の詩がほぼ年代順に配列されていると見なす根據は、例えば『溫公文集』卷十四には、熙寧十年に歿した邵雍を悼む「邵堯夫先生哀辭二首」が収められているが、この三首後に「和景仁七十一偶成」、續いて「六十寄景仁」が見え、范鎮と司馬光の年齢から判断するとこれらで作られたのは元豐元年であり、この部分の作品は年代順に配列されていることが分かる。その外に、司馬光が洛陽で詩を唱和した人物に王拱辰及び文彦博がいるが、李之亮「北宋京師及東西路大郡守臣考」(巴蜀書社、二〇〇一年)に據れば、兩者が司馬光と時を同じくして洛陽に居

司馬光の洛陽退居生活とその文學活動

住したのは、王拱辰が判河南府を勤めた熙寧五年〜八年、文彦博が判河南府を勤めた元豐三年〜六年であり、司馬光がこの二人と詩を唱和したのは、他の作品の配列を勘案するとほぼこの時期であることが分かる。このような事から、少なくとも司馬光の洛陽時代の詩に關しては年代順に配置されていると考えられる。

- (5) 原文は次の通り。「眇然如顔子之在陋巷、曩然如屈原之在陂澤」(『司馬溫公神道碑』『東坡集』卷三十九)。

- (6) 原文は次の通り。「司馬彪曰、獨往、任自然不復顧世也。」

- (7) 北宋文學において「樂」という概念が重要であることは、程傑『北宋詩文革新研究』(文津出版社、一九九六年)第十三章「北宋詩文革新中『樂』主題的發展」に指摘がある。また文學そのものに對する樂しみに對して論じた研究に、綠川英樹「文字之樂—梅堯臣晩年の唱和活動と『樂』の共同體—」(京都大學中國文學會、『中國文學報』第六十五冊、二〇〇二年)がある。

- (8) 白居易と洛陽との關わりについては、拙稿「白居易と洛陽」(九州大學中國文學會、『中國文學論集』第三十四號、二〇〇五年)を参照。

- (9) 該當する原文はおよそ次の通り。「司馬溫公在洛陽、自號迂叟、謂其園曰、獨樂園。園卑小、不可與它園班。其曰讀書堂者、數十椽屋。澆花亭者益小。弄水・種竹軒者尤小。曰見山臺者、高不過尋丈。曰釣魚菴、曰采藥圃者、又特結竹杪・落蕃・蔓草爲之爾。」(『古今逸史』所收)

- (10) 『孟子』盡心上に「窮すれば則ち獨り其の身を善くし、達すれば則ち天下を兼ね善くす」とあるが、司馬光にとって「獨樂」と「獨善」とは等しい概念ではない。例えば「答陳師仲監簿書」(『溫公文集』卷六十二)において、「豈敢効古之人以道不行而自藏哉」と述べるように、司馬光は自身の洛陽退居が、現實社會に對する抗議の表れであると見られることを否定している。

- (11) 馬東瑤『文化視域中的北宋熙豐詩壇』(陝西人民教育出版社、二〇〇

六年)、六〇—六一頁にも同様の指摘がある。

- (12) 「尚齒會」とは、白居易が始めた集會である。七十歳以上の致仕した老人によって開催され、官位ではなく年齢の高下によって席次を決めた。耆老會・九老會とも稱する。白居易の「胡吉鄭劉盧張等六賢、皆多年壽予亦次焉。偶於弊居、合成尚齒之會。七老相顧、既醉甚歡。靜而思之、此會稀有。因成七言六韻以紀之、傳好事者」詩(那波本『白氏文集』卷七十一)に因む。

- (13) 眞率會の構成員は次の詩題に見える。「二十六日作眞率會、伯康與君從七十八歳、安之七十七歳、正叔七十四歳、不疑七十三歳、叔達七十歳、光六十五歳、合五百一十五歳。口號成詩、用安之前韻」其一(『溫公文集』卷十四)。また、眞率會に范純仁や鮮于侁も加わったことは、「范忠宣公行狀」(明・毛一鷺編『范忠宣公集』卷七)、范純仁(「鮮于」)子駿作眞率會招安之不至」二首(同卷五)より看取される。

- (14) 歐陽脩が洛陽にて「八老」の集會を催したことは、王水照『北宋洛陽文人集團的構成』(『王水照自選集』、上海教育出版社、二〇〇〇年)、第一五六頁を参照。また北宋期にこの種の多くの集會が開かれたことが、歐陽光『宋元詩社研究叢稿』(廣東高等教育出版社、一九九六年)に指摘されている。

- (15) 陶淵明が反俗の詩人であったことについては、拙稿「陶淵明『讀山海經』詩に見える『楚辭』の影響」(廣島大學東洋古典學研究會、『東洋古典學研究』第七集、一九九九年)を参照。

- (16) 北宋・呂希哲『呂氏雜記』(文淵閣四庫全書所收)卷下に次のようにある。「與楚正叔通議、王安之朝議、耆老者六七人、相與會於城中之名園・古寺。且爲之約、果實不過五物、殺膳不過五品、酒則無算。以爲儉則易供、簡則易繼也。命之曰、眞率會。文潞公、時以太尉守洛、求欲附名於其間。溫公爲其顯弗納也。一日、潞公伺其爲會、戒厨中具盛饌、直往造焉。溫公笑而延之曰、俗卻此會矣。相與歡飲、夜分而散。亦一時之

盛事。」

- (17) 原文は次の通り。「貴賤造之者、有酒輒設、潛若先醉、便語客、我醉欲眠、卿可去。其眞率如此。」

- (18) 「眞率會」「洛陽耆英會」が持つ性質については宋衍申、木田知生、伊原弘の三氏の説がある。宋氏は「洛陽耆英會」を「實質上、在野の政治團體」であると見なす(『司馬光評傳—忠心爲資治、鴻篇傳千古』、廣西教育出版社、一九九五年、一三一頁)。木田氏は「洛陽耆英會」の構成員に新法に反対した人物が多いことから、「彼らの歡談の場で様々な情報交換が行われた」と見る(『司馬光とその時代』、白帝社、一九九四年、二六一—二六二頁)。伊原氏は、木田氏の説に異を唱え、司馬光らの活動を政治・文化にわたる鬭争運動的なものと捉えることには否定的であり、北宋期において、司馬光らに先行するこの種の老齡の士大夫による集會が存在したことを指摘する(『中國開封の生活と歲時—描かれた宋代の都市生活』、山川出版社、一九九一年、一七八—一八三頁)。宋・木田兩氏の説は可能性としては大いに考え得るものであるが、兩氏の見解を裏付ける決定的な資料を見出し得ないため、筆者は伊原説に左袒したい。

- (19) 「新發現的司馬光《與范夢得內翰論修書帖》考論」(『華東師範大學學報』《哲學社會科學版》、一九八八年第一期)

- (20) 「題新潤亭兼訓寄朝中親故見贈」(那波本『白氏文集』卷六十九)に次のようにある。「何處披襟風快哉、一亭臨澗四門開。金章紫綬辭腰去、白石清泉就眼來。自得所宜還獨樂、各行其志莫相哈。禽魚出得池籠後、縱有人呼可更迴。」

- (21) 「迂叟」詩の原文は次の通り。「一辭魏闕就商賈、散地閑居八九春。初時被目爲迂叟、近日蒙呼作隱人。冷暖俗情諳世路、是非閑論任交親。應須繩墨機關外、安置疎愚鈍滯身」(那波本『白氏文集』卷六十一)。なお司馬光の號が白詩に基づくことは、南宋・龔頤正的『芥隱筆記』「樂天

詩」の條に指摘がある。原文は次の通り。「醉翁、迂叟、東坡之名、皆出於白樂天詩云。」〔學津討原〕所收)

(22) 南宋の黃徹は、「溫公自稱迂叟。香山居士亦嘗以自號、其詩云、初時被目爲迂叟、近日蒙呼作隱人。司馬、豈慕其洛居有閑適之樂耶」(『碧溪詩話』卷九)と述べ、司馬光が迂叟と號したのは、單に白居易の閑適の生活を慕ったのではないという。

(23) 該當する原文は、およそ次の通り。「先生(劉安世)曰、老先生(司馬光)既居洛、某從之蓋十年。老先生于國子監之側得營地、創獨樂園、自傷不得與眾同也。以當時君子自比伊周孔孟、公乃行植竹澆花等事、自比唐晉間人、以救其弊也。」(北宋・馬永卿編、明・王崇慶解『元城語錄解』卷中 文淵閣四庫全書所收)

(24) 南宋・胡仔『茗溪漁隱叢話』後集卷二十一に、次のように見える。「茗溪漁隱曰、東坡有詩云、(中略)。與元城(劉安世)所云、當時君子自比伊周孔孟、意皆誚金陵(王安石)也。」

(25) 該當する原文は、およそ次の通り。「溫公治第洛中、闢園曰、獨樂。其心憂樂、未始不在天下也。其自作記有云、世有人肯同此樂、必再拜以獻之矣。」〔碧溪詩話』卷一)

(26) 原文は次の通り。「溫公自爲之序、諸亭臺詩、頗行於世。所以爲人欣慕者、不在於園耳。」

(27) 該當する内容は次の通り。「司馬溫公既居洛、(中略)嘗同范景仁過韓城、抵登封、憩峻極下院、登高頂、入崇福宮・會善寺、由轅轅道至龍門、遊廣愛・奉先諸寺、上華嚴閣・千佛峯、尋高公堂、渡潛溪、入廣化寺、觀唐郭汾陽鐵像、涉伊水至香山皇龍、憩石樓、臨八節灘、過白公影堂。凡所經從多有詩什、自作序曰、遊山錄。士大夫爭傳之。」〔邵氏聞見錄』卷十一)

(28) 原文はおよそ次の通り。「公(鮮于侁)之在西京也、今樞密范公(范純仁)亦領臺事、而司馬溫公提舉崇福宮。三人相得歡甚、摯紳慕其游。」

司馬光の洛陽退居生活とその文學活動

(北宋・秦觀「鮮于子駿行狀」『淮海集』卷三十六)

(29) 程傑氏は注7所掲書において、北宋の士大夫における「樂」は、「時を樂しむ」「民を樂しむ」「民と樂しむ」「賢者と樂しむ」の四つの主題を持つものと見なし、「賢者と樂しむ」樂は、「民と樂しむ」樂が發展したものであると述べる(二七四〜三七六頁を参照)。

(30) 「宋代文藝における俗の概念―蘇軾・黃庭堅を中心にして―」(九州中國學會報』第十三卷、一九六七年)を参照。

(31) 王安石詩の本文は四部叢刊初編本に基づき、併せて李之亮補箋『王荊公詩注補箋』(巴蜀書社、二〇〇二年)を参照した。

(32) 原文は次の通り。「致堂胡氏曰、司馬公六任冗官、皆以書局自隨。歲月既久、又數應詔上書、論新法之害。小人欲中傷之、而光行義無可訾者。乃倡爲浮言謂、書之所以久不成、緣書局之人、利尙方筆墨・絹帛及御府果餌・金錢之賜耳。既而承受中貴人陰行檢校、乃知初雖有此旨、而未嘗請也。光於是嚴課程、省人事、促修成書。」

(33) 内山精也「宋代士大夫の詩歌觀―蘇軾「白俗」評の意味するもの―」(『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』、研文出版、二〇〇六年)

(34) 原文は次の通り。「端明殿學士司馬公、以清德直道、名重天下。其脩身治家、動有法度、其子弟習而化之、日趨于善。蓋亦不言之教矣。又伸之以詩章、俾其諷誦・警策、則其積善・貽謀之道、可謂至備、宜其子子孫孫世有令人。」

(35) 司馬光が華々しいばかりで實が無く、道德に無益な詩を嫌ったことは、注1所掲『宋金元文學批評史』上冊にも指摘がある(一一二〜一二三頁を参照)。また、馬東瑤氏は注11所掲書において、司馬光等の努力により、洛陽が儒學の一大根據地として、中國全土に名を知られたこと、司馬光を中心とする洛陽詩壇の人々によって作られた詩歌は、純文學的にはほとんど影響力を持たないが、政治・思想・學術と緊密に結びつき、多くの文化的意義を擔っていることを指摘する(九三頁を参照)。司馬

光の詩文が儒家的精神の産物であることは、氏の指摘を待つまでもなく明らかであろう。

(36) 原文は次の通り。「東坡賦詩云、兒童誦君實、走卒知司馬。蓋言其得人心也。又云、撫掌笑先生、年來效瘡癥。疑未盡命名之意。」(『碧溪詩話』卷一)

(37) 洛陽が政治的にも文化的にも開封と對立的な關係にあったことは、木田知生「北宋時代の洛陽と士人達―開封との對立のなかで―」(『東洋史研究』第三十八卷・第一號、一九七九年)に論じられている。

(38) 王水照「北宋洛陽文人集團の構成」、「北宋洛陽文人集團與地域環境的關係」、「北宋洛陽文人集團與宋詩新貌的孕育」(共に注14所掲『王水照自選集』に所收)を参照。